

ろくおん通信

発行日： 1993年11月 15日

No. 58号

発行者： 盲人情報文化センター録音製作係

「音声訳」を考える (第9回)

漢字の補足 その4

録音製作 清水賢造

【例文】

「・・・大海人(材ア)は天武と諡(ウケ)されたが、伊勢神宮の神主が天平二年に著わした伊勢神宮の由緒書である『往代希有記』には、仁武と表記されている。彼は仁武ともいわれていたのである。仁武は又、神武天皇に通じ、『書紀』の神武天皇条に天武の行為が投影されているというのは、多くの人が指摘しているが、このことから裏付けられよう。ところで、六四五年にはじまった太宗の高句麗征伐から二年後の六四七年、太宗は二度目の対高句麗戦を計画する。そこで、同年一二月、高句麗の宝蔵王は、子の莫離支高任武を入唐させ、太宗に謝罪させた(『新唐書』<列伝一四五・東夷>「高句麗本紀」)。

莫離支という称号は当時、蓋蘇文だけにかかるから、高任武はおそらく蓋蘇文本人である。①任武は仁武とも読める。②玉は陰陽五行思想でいえば、陽の水であり、大海を暗示しよう。イはニンベンで人である。これより、任の一字から③大海人という名が浮かび上がってくるのだ。・・・」

さて、前回の例文を考えてみます。

この例文では①②③と数字を打ったところが音声訳者の補足が必要なポイントになります。

①は同音異義語が問題になっているところ、

②は形(漢字)が問題になっているところ、

③は音と訓の関係が問題になっているところ、

です。3箇所はそれぞれ補足を必要とする性質が異なりますので、それぞれにふさわしい補足をしないと文章が正しく伝わりません。

まず、①の同音異義語は「ジム」の処理が問題です。①の前から3人の「ジム」が登場しますが、話としてわからなくなるところは、①の「任武は仁武とも読める」というところでしよう。それまでの「ジム」は、「『往代希有記』のジム」と「ジムテンノウのジム」「コウジム」の三人が出てきていることはわかります。だからわざわざ字の説明は不要です。

しかし、「ジンはジムと読める」のところでは、どの「ジム」なのか区別がつきませんので読者にわかるように補足しなくてはなりません。区別の方法は、前回の説明のポイントにあげたように、「同音異義語の説明は漢字をわからせる事が目的ではなく、どちらの言葉かをわからせること」が目的です。

これを漢字の説明でわからせようとする、最初に出てきた時に、それぞれの「ジム」の漢字を説明して、①のところで漢字の説明をすることになりますが、そうすると読者は本文の文章を考えながら、3人のジムの漢字を覚え、漢字の説明を受けて、該当する人物に置き換える作業もしなくてはなりません。この文章の場合、3人の「ジム」を区別する言い方が本文にありますので、それを使って補足すると、どの「ジム」かがはっきり伝わります。

「コウ任武は、オウダイケウキの仁武とも読める。」とするか、「任武、ワジムは、仁武、ワヂヤジム、とも読める」とするとよいでしょう。

さて、次は②の「壬」と「イ」の処理です。字のとおり、「ジン」「イ」と読んだのでは何のことだかわかりません。「ジム」の「ジン」の字ですが、この場合、どの「ジム」の「ジン」かまで確定させないとだめです。話しは、高任武の「任」の「へん」と「つくり」を問題にしていますので、補足の仕方としては、「高任武のジンの偏は、陰陽五行思想でいえば、陽の水であり、大海を暗示しよう。つくりはニンベンで人である。」といった補足になるでしょう。

③の「おおあま」という名前が浮かび上がってくるのだ。」というところです。ここは補足がないと、どうして「おおあま」が浮かび上がるのかわかりません。「おおあま」が「大海」と「人」という字を書くことを知っている人以外には通じません。もし、「タイカイジン」などと間違った読み方をしたら、つながりはわかるかもしれませんが、意味が通じません。補足をするとしたら、「大海人が浮かび上がってくるのだ。(音声訳者注)オオアマは、タイカイにヒトと書きます。(注終わり)・・・」となるでしょう。

さて、皆さんはどんな補足を考えましたか。漢字の話をいろいろ取り上げているとかえって混乱してしまい、必要以上に補足を入れようとされた方はありませんでしたか。補足のポイントを押さえて本文の内容がよりスムーズに伝わるように配慮することが大切です。何度もいいますが、漢字の補足は、

漢字を説明することが目的ではなく、内容を正しく伝えるために補足する

ということです。ただ漢字を説明すれば良いわけではありません。説明が多すぎてかえって混乱したり、補足のポイントがずれては何の為に補足しているのかわかりません。音声訳者は日頃からこれらの補足の仕方などを、さまざまな例などで研究しながらそのセンスを養っていくことが大切です。

最近、「音声訳は誰でもできる」という声も聞かれますが、「墨字資料を音声に変換したときに、内容が正しく伝わるように音声訳する」仕事はだれでも簡単にできるというものではありません。点訳ボランティアがマス開けなど一定のルールを覚えてはじめて点訳技術者として認められているように、音声訳者も高度な技術を必要とする技術ボランティアです。しかし、一般的にそのようになかなか認識されていません。それは、これらの音訳処理の問題が、点訳のマスアケ

の様に、まだ充分ルール化されていないことや、読むのはだれにでもできるから音声訳もだれでもできるといった考えがあるからでしょう。「音声訳」の仕事が、「表現技術」、「録音技術」、「調査技術」が必要であることは理解されても、「聞き手にわかるように読む処理技術（構成処理も含めて）」についてはまだ音声訳者自身にも充分認識されているとはいえない状況にあるといえます。この「処理」については、日盲社協で出している『レコーディングマニュアル』や『活動するあなたに』（改訂版）などで、一定の「処理」の方法を示していますが、具体的に、研究していけるものは、『ろくおん通信』くらいしかないのが実情です。ここでいろいろな提案をしているものは、現時点での方法として、最善と思われる方法を提起しているものですが、決して絶対的なものでもありません。さらによりよい方法があればどんどん意見をあげてくださるようお願いします。

漢字の処理については、11月の「第2回音声訳研修の会」で使用する資料を掲載（P4～P5）していますので研究してください。また、「音声訳研修の会」への参加は自由です。お気軽にどうぞ。

さて、次回は「ルビの読み方」について考えます。

つづく

『ろくおん通信』の発送部数について

現在、『ろくおん通信』の発送は、府下を中心に66グループを越え、印刷部数も千部以上になっています。『ろくおん通信』を、音声訳者の為の『研究誌』として、充実させる為に例文などを多く取り入れていきたいと考えていますが、印刷部数が増えていることや、郵送料がかさむなどでかなり制限されています。今後、増ページの発行も考えていますが、その分、グループへの発送部数を調整させて頂くこととなりますので予めご承知おき下さい。

正誤表から・・・その33

語句	誤読	正しい読み	語句	誤読	正しい読み
多作家	タサッカ	タサクカ	芸妓	ゲイコ	ゲイギ
懇望	コンボウ	コンモウ	赤褐色	アカッショク	セッカッショク
一夕	イチユウ	イッセキ	目ノ当リ	メノアタリ	マノアタリ
賃貸料	チヤクリョウ	チタリョウ	合する	ゴウする	ガッする

二通りの読み方があるがそれぞれ意味が異なるもの・・・その20

追従	ツイジュウ ツイショウ	人の後につき従うこと 媚びへつらう事	中間	チュウカン チュウケン	仏語。武家の召使い。
何人	ナニト ナニン	どういう人	工夫	クワ コウ	
化生	ケショウ	(仏語)四生ノ一、仏・菩薩又ハ 天界の衆生の類	御守	モリ	補佐シ、守ルト。マツリ人、子守
	カエ	生まれ出ること		マツリ	守リ札

※前号で、『号哭』の読み方が間違っておりました。正しくはゴウクで、ゴウカは間違い。
また、『在世』はザイイという読みもあるようです。一般的にはザイ他。
お詫びとともに訂正をお願い致します。

第2回音声訳研修会の資料

次回の「音声訳研修会」11月26日(金)1時半~3時半

当日は前回の残りも行いますが、ここに掲載した練習問題も使用します。参加者は事前に研究しておいて下さい。

【問題1】

昔も今も大工は便利なら何でもとりいれるが、工法技術はとりいれなかったから和風は保たれていたのである。たとえば和風は釘を打つことを嫌う。「柄(柄)」(臍?)とって柱や梁の一方に凸字型の突起をつくり、一方には凹字型の「ほぞ穴」をつくり、そこへさしこめば釘を打たないですむし、こゆるぎもしない。和家具は「さしもの」(指物)と呼んですべてさして組立て、これまた釘を打たない。

【問題2】

この日の朝日の別の記事には、「陛下」も敬語も使われていたから、「朝日が敬語不使用に踏み切った」のでないことは明らかだ。

「命までとはいかなくとも、生活、立場、人生をかけて体制・大勢と闘っている多くの人たちにこれまで取材を通して出会ってきました。そうした人たちとつきあいを深めるほど空虚な自分に気がつかざるをえません。せめて皇室敬語廃止ぐらい、いやこれこそ自分の立場でやらなければ——こうした想いが、私を今回の行動に出させた自分なりに解釈しています」と鹿児島のある若い記者は言う。すべての記事を西暦で書こうという運動も始まっている。

(『客観報道』浅野健一著)

【問題3】

……。賭にも似た三度目の手術は師走に行われた。病院のなかのスチームがいつもより大きく音をたてる朝、麻酔をうたれた沼田を乗せたストレッチャーは、看護婦に押されて長い廊下を手術室に向かった。(ここを戻るとき)天井の無影燈をみながら沼田は思った。(生きていたろうか)

四時間にわたる手術後、彼はふたたび自分の病室に連れていかれたが、麻酔からさめたのは翌日の朝で、鼻にはゴム管が入れられ、腕には点滴の針が刺しこまれていた。時々、看護婦が来て、まだ半覚醒の彼の血圧をはかり、モルヒネの注射をうった。すべて二度の手術と同じだった。

数日後、やっと息がつけるようになってから彼はつき添っている妻にたずねた。

「九官鳥は」

「……………」

と妻は口ごもった。

「あなたの事で手がいっぱい、病院の屋上においたまま忘れていたの。気がついて見に行ったら……もう死んでいた」

今更、妻を責めるわけにはいかなかった。……

(『深い河(ディープリバー)』遠藤周作著)

【問題4】

……妻が息をひきとったとき、彼は時計を見て時刻をたしかめた。

ここでも、作家は妻の枕元に坐り、眼を凝らして、妻の「死が通過して」いくのをみつめている。そして、「息をひきとる」ことを観察し、その「死」を確認している。

「生きる」とは「息る」といわれ、「生きもの」は「息もの」であり、また「いのち」とは「息の内」といわれる。「生き」は「息」であり、「生きている」とは「息している」ことである。「意気」「勢い」「粹」も「息」に通ずる。また、「むすこ(生す子)」「むすめ(生す女)」に「息子」「息女」の字を当てるのも、生=息という考えかたからである。

生=息なら、死とは呼吸停止のほかのなにものでもない。ところが、レスピレーターの出現によって、呼吸しているのに「脳死」という厄介な問題がおこってきた。「肺臓死」は「息」によって、観察できる「見える死」であったが、「脳死」は普通の人には観察できない「見えない死」である。ここに、生死をこの眼で確認できなくなった現代人のやり場のないもどかしさがある。

それにしても、「息をひきとる」ということばは、「生死のあわい」というおもいを抱く日本人にふさわしい、いかにも心優しいことばである。「ひきとる」とは「手もとに受け取る」「もとに戻る」「引き継ぐ」という意である。息は消滅するのでもなく、断絶するものでもなく、もとあった所へ戻り、引き継がれていくのである。

死は決して消滅でも断絶でもない。それは、後の生から前の生へと戻り、前の生から後の生へと受け継がれていく、ひとつの過程なのである。

息のひきとるさまをしっかりとみつめるのは、あるいは愛する者の息を自分の「息の内=いのち」にひきとるというおもいが、そこに無意識に隠されているといえるかもしれない。

(『病いと健康のあいだ』立川昭二著より)

【問題5】

わが病やうやく癒えて歩みこし最上の川の夕浪のおと

斎藤茂吉『白き山』

「いやす」の「い」は語源的には「忌」にあたるといわれ、そこからは「共同体が斎戒して生命氣息(いのち・イキ)を復する」というモチーフがうかぶ。漢字の「癒(ユ)」は「愈」に通じ、「愈」から出ており、「愈」は舟で流れを行くさまで、すすむ、やすらか、やわらぐ、いえる、などの意味がある。「愈」はまた「愉」に同じで、これにはよろこぶという意味がある。また「いやす」の「やす」は安らか、優しいに通じる語感をもっている。」

(『病いと健康のあいだ』立川昭二著より)

ご案内

近点協

ボランティアの集い

日時 : 12月10日 (金) 10:00~15:00

場所 : 盲人情報文化センター

費用 : 1,000円 (昼食・資料代等)

テーマ :

午前 点訳・音訳の為の調査テクニック

講演 山本晴代 氏 (府立夕陽丘)

午後 分科会 1) パソコン点訳の実際

2) きれいに録音する方法

第2回

音声訳研修の会

場 所: 盲人情報文化センター6階

日 時: 1993年11月26日 (金)

13:30~15:30

内 容: 音声変換研究 (処理の研究)

* 参加費無料。どなたも参加出来ます。

** 資料は一部P4-P5に掲載しています。

東洋医学関係図書音訳勉強会ご案内

第3回 11月19日 (金)

講 師: 片山一夫 氏 (国立神戸視障センター)

会 場: 盲人情報文化センター 6階

時 間: 13:00~17:00

参加費: 100円 (資料代等含む)

音訳グループ

リーダー連絡会

場 所: 盲人情報文化センター6階

日 時: 1993年11月26日 (金)

15:30~16:30

内 容: グループ交流・意見交換

参加者: グループリーダー

リクエスト図書一覧

以下の図書は利用者から製作依頼を受けている図書です。

グループの方で、音声訳が可能な方がありましたら係までご連絡ください。

『概説統一原理レベル4』 / レベル4編集委員会 : <宗教>

『河内野新歳時記』 / 若林南山偏 : <詩歌>

『無功德58号. 59号』 / 承福寺著 : <宗教>

『未完の女 リリアン・ヘルマン自伝』 / リリアン・ヘルマン著 : <小説>

『砦 大島健甫短編集』 / 大島健甫著 : <小説>

『宇宙船天空に満つる日』 / 渡辺大起著 : <宗教>

『俳句会報みまつ8. 9. 10月号』 / みまつ俳句会編 <詩歌>